

## 研究課題 81

# 19世紀後半から第二次世界大戦までの演劇界における女性の自立：日本、イギリス、フランスの比較

### 1. 1880年代イギリスの新劇運動管見

——イプセン『人形の家』の英国での初期受容とエリノア・マルクス、メイ・モリス、G・B・ショーの協働をめぐる

川端 康雄

#### はじめに

イギリスのヴィクトリア朝期（1837-1901）は一般に繁栄の時代と見られている。国内では18世紀末以来世界に先駆けて工業化を進め、中流階級が力を増し、対外的には列強のなかで競争に勝ち抜きイギリス帝国としての繁栄を見た、「ボックス・ブリタニカ」とも形容された覇権国家の時代、と大まかにいうことができるが、もっと細かく見るならその長い治世のなかで起伏がある。1880年代は70年代以来のイギリス経済の不況のなか、不熟練労働者のみならず、熟練労働者も失業や低賃金の影響を被ったことで、政治的な改革運動（労働運動、社会主義運動）が盛り上がった。同時に文化・芸術面でも新しい動きが出てきている。工芸の改革運動がそのひとつで、1888年に第一回アーツ・アンド・クラフツ展を開催したほか、いくつもの工芸団体が組織され、20世紀の世界各地の工芸運動（そのひとつに日本の民藝運動が含まれる）の影響源となる重要な活動がこの時期に興隆している。そしてこれら芸術・政治の両面の前衛運動に関わったキーパーソンとして、私が主要な研究対象としているウィリアム・モリス（William Morris, 1834-96）がいる。本研究では、直接モリスを取り上げるのではなく、そのモリスの周辺で展開された演劇の新しい潮流について、イプセンの英国での初期受容に貢献した3人の人物——エリノア・マルクス（Eleanor Marx, 1855-98）、メイ・モリス（May Morris, 1862-1938）、ジョージ・バーナード・ショー（George Bernard Shaw, 1856-1950）——に注目して調査を進めた。

### 1. エリノア・マルクスとエドワード・エイヴリング

『ミス・マルクス』（*Miss Marx*）という映画がある。2020年9月のヴェネツィア国際映画祭で初上映されたスザンナ・ニッキヤレリ（Susanna Nicchiarelli, 1975-）監督の作品で、日本では翌2021年に劇場公開された<sup>1</sup>。これはカール・マルクス（1818-83）の末娘エリノア・マルクスを描いた伝記映画である。むろん脚色はあるものの、社会主義者としての活発な活動、パートナー（「事実婚」の夫）であるエドワード・エイヴリング（Edward Aveling, 1849-98）との波乱に富む生活、そしてエリノアの不幸な死など、彼女の特異かつ際立った生涯をよく伝えている。演劇に情熱を傾けたこともそこには描かれていて、本発表に関わるエピソードとして、イプセンの『人形の家』のダイアローグをエリノアがエイヴリングと朗読している場面が出てくるのが注目される。

1 以下の「予告編」を参照。<https://eiga.com/movie/93564/>



エリノア・マルクス

父親の知名度に比べて、エリノアは（たまにこうした映画で取り上げられる機会をのぞいて）一般に注目されることはほとんどないのだが、英国における草創期の社会主義運動のなかで重要な役割を果たしたことはもっと知られてよい。父カールは政治亡命者として1849年から家族とともにロンドンに移り住み、以後その地を活動拠点とした。文献調査で最も活用した機関が大英博物館（そのなかにあったブリティッシュ・ライブラリー）であったことはよく知られている。そういう次第でエリノアはロンドンに生まれ英語を母語として育った。3人の娘のなかでこの末娘のエリノア（愛称トゥッシー Tussy）が最も知的好奇心にあふれ、父マルクスの仕事に共感し、早くも16歳で父の助手となり、国内外の社会主義運動にふれた。さらに父の影響もあって少女期から演劇を愛好し、とりわけシェイクスピアを愛読し、将

来女優になることを夢見た。じっさい、俳優を志すものの、結局断念する。ただし演劇との関わりは続く。1883年の父の死後にはその遺稿の整理、編集、また『資本論』初の英訳に関与。1884年にはハインドマンの社会民主連盟に参加。エドワード・エイヴリングに出会い「結婚」（といってもエイヴリングは既婚者だったが）、以後エリノア・マルクス・エイヴリングと名乗った。エイヴリングはユニヴァーシティ・コレッジ・ロンドンのフェローで王立音楽院英文学教授、多彩な才能の人物で、エリノアとは社会主義運動の同志でもあったが、演劇への情熱も共有し、成功はしなかったものの劇作家としていくつか戯曲を書き上演している。私たちの研究課題に関わる重要点は、「近代演劇の創始者」と評価され、日本の近代演劇にも大きな影響を与えたノルウェイの劇作

家ヘンリック・イブセン（Henrik Ibsen, 1826-1906）の代表作『人形の家』（*Et dukkehjem*, 1879年）に二人がいち早く注目して、英国の演劇界・文壇に積極的にプロモートしたことだった。



ヘンリック・イブセン

## 2. G・B・ショーとメイ・モリスの協力

『人形の家』は、1879年にデンマーク王立劇場で初演がなされた。英国では1882年にヘンリエッタ・フランシス・ロード（Henrietta Francis Lord, 1848-1923）によってこの三幕劇の最初の英訳がヒロインの名を採って『ノラ』（*Nora*）のタイトルで刊行されたが、一般にはほとんど注目されずにいた。1884年にはヘンリー・アーサー・ジョーンズ（Henry Arthur Jones, 1859-1952）とヘンリー・ハーマン（Henry

Herman, 1832-1894) によるヴィクトリア時代向け改作版 (*Breaking a Butterfly*) がプリンス劇場 (ロンドン) で上演された。「改作」というのは、この時代の中流階級の「リスペクタビリティ (体面)」を損なわないようにという配慮から、原作の衝撃的なエンディング (戯曲の最後で、弁護士トルヴァル・ヘルメルの妻ノラが夫から人間でなく「人形」として扱われていることを認識して、自立すべく夫も子供も捨てて家を出ていく) をすっかり変えて、二人は和解して円満な結婚生活に戻るといふ、イプセン本人が見たら呆れるような改変がなされたのだった。そうしたなかで『人形の家』(『ノラ』) の原典を損なわない紹介をおこなう必要があることをエリノア・マルクスとエドワード・エイヴリングは痛感した。彼らが1885年初頭に——オリヴ・シュライナー (Olive Schreiner, 1855-1820) の助言もあって——考えたのが『ノラ』の朗読会を開くことだった。その際、エリノアは知己のG・B・ショーに協力を仰いだ。当時ショーは29歳、劇作家としてはまだ駆け出しで、むしろ評論家として、またフェビアン協会の一員としての社会主義の理論家としてのほうが知られていた。さらにエリノアはメイ・モリスに声を掛けた。ショーについてはこれ以上紹介するまでもないだろうが、メイについてはここでいくらか説明しておく必要があるだろう。

メイ・モリスはモリス夫妻 (ウィリアム・モリスと、ラファエル前派のモデルとして知られるジェイン) の次女で、エリノアと同様に父親の名声に隠れがちの人物である。じっさい、私自身も、メイといえは父ウィリアムの著作集24巻およびその補遺2巻の単独編集というウィリアム・モリス研究の基礎テキストを編んだ人としてまず記憶に刻まれ、その他の仕事についてはジャン・マーシュ (Jan Marsh) の研究などからある程度知識を得ながらも、深く掘り下げずにいた。しかし21世紀に入って工芸としての刺繍のデザイナー兼実作者、また理論家 (刺繍を論じた単著 *Decorative Needlework* もある)、指導者としての業績に光が当てられ、2017年には工芸デザイナーとしての彼女の仕事の全貌を示す試みとしてアンナ・メイソン (Anna Mason) 編による『メイ・モリス——アーツ・アンド・クラフツ・デザイナー』が刊行された。さらにロンドンのウィリアム・モリス・ギャラリーで2019年11月から翌年3月まで特別展「メイ・モリス——芸術と人生」(*May Morris: Art & Life*) が開催された。

メイは父の芸術面での活動に随伴しただけでなく、彼の政治活動にも共感し、1885年暮れに結成する社会主義同盟 (Socialist League) に加わり、集会への参加、街頭での機関紙の販売などの活動の一翼を担った。モリスと並んで同盟の創立メンバーであったのがエリノアとエドワード・エイヴリングで、数年間は彼らは同志としてこの組織で共闘する。エリノアがメイを知るのはここでの政治運動をとおしてのことだったと思われるが、すでにショーがモリス家に入出入りしていてメイとも親しくしていたので (じっさい、1885年から86年にかけて、二人は交際していたようであ



メイ・モリス 1886年3月  
フレデリック・ホリヤー撮影

る<sup>2)</sup>、ショーが仲介したのかもしれない。いずれにせよ、エリノアはメイをブルームズベリー地区グレイト・ラッセル・ストリートの自宅に招き、『ノラ』の朗読会企画に参加を請うた。ショーに宛ててエリノアはこう伝えている。

昨日、彼女がここへ来ました。彼女の名前が由来する、その〔五月の〕花と同じようにやさしく美しく見えました。彼女を眺めると、新鮮なそよ風に吹かれるようです。人はみな美しいものを、私と同じように激しく感じ取っているのだろうか、とふと考えます。美はいつも、とにかくしばらくの間は、この世の中にも、どこかに何か、善なるものがあるに違いない、と信じさせてくれます。(都築 181 に引用)

このときエリノアは 30 歳、メイは 6 歳下の 24 歳だった。若さの盛りにいるメイの立ち振る舞いに魅せられたエリノアの感動がよく伝わる文面である。

なお、エリノアほどではないが、メイも演劇への関心は強かった。数本戯曲を書いて発表したことがある。また、1887 年秋に父ウィリアムが書いてみずから演出した一種のアジプロ劇『テーブルはくつがえる、ナプキンは目覚める——社会主義の幕間劇』(*The Table Turned; or, Nupkins Awakened: A Socialist Interlude*) にメイはヒロインのメアリー・ピンチ役で出演している(この上演の詳細については川端を参照)。



(左から) メイ・モリス、ハリディ・スパーリング、エマリー・ウォーカー、G・B・ショー (1886 年頃)

### 3. 『ノラ』の朗読会

『ノラ』の朗読会が実現したのは 1886 年に入ってからのことだった。エイヴリング夫妻の住居で、社会主義の同志を中心とした「これを朗読してあげるのにふさわしいごく少人数の人びと」(都築 182 に引用) を招いて 1 月 15 日に披露された。配役はノラ・ヘルメルをエリノアが、ノラの夫の弁護士トルヴァル・ヘルメルをエイヴリングが演じ、ノラを脅迫する弁護士クログスタをショーが、そしてノラの幼なじみのクリスティーネ・リンデの役をメイが務めた。エリノアがショーにクログスタ役を依頼した際、手紙にこう書いたのだった。「その役を演じるのに、あなたが正気でなければならぬ必要は少しもありません。逆なのです。狂っていればいるほどよいのです。[...] 誰か本当に偉大な俳優がイブセンを試みてほしいと思います。[...] イブセンの偉大な教えを広めるこ

2 比較的最近公開された資料として、1886 年 2 月 14 日にメイ・モリスがショーに送ったヴァレンタイン・カードがある。メイ自身の詩にイラストをあしらった非常に手の込んだカードで、当時のメイのショーへの熱中ぶりが伺える (Kelly および Kennedy を参照)。とはいえ、二人が結婚に至ることはなく、メイは 1890 年にハリディ・スパーリング (Holiday Sparling, 1860-1924) と結婚している (8 年後に離婚)。

とは「…」真の義務でしょう。私のささやかな努力は、つたない端緒にすぎません」(都築 181-82 に引用)。ショーはといえば、自伝にこう書いている。

ミス・ロードによる『人形の家』の翻訳が出されて、社会主義者の友人の一部がこれに非常に感激したのだから、内輪の朗読会まで催したのだが(そこで私はクログスタ役を振られた)、その戯曲がもっている結婚の倫理に関する独創的な考察は、ヨーロッパを震撼させたようには私を震撼させることはなかった。(Weintraub 96.)

これはいかにもショーらしいコメントであるが、イブセンに影響されたわけではなく自分は独自に資本主義化の結婚制度についての批判的考察を得たのだという主張がここで暗になされている。

『ノラ』の朗読パフォーマンスは上々の出来で、朗読のあと、イブセンが提起した問題について白熱した議論が交わされた。このあと数年のあいだにイブセンの英国内での声望は高まり、新劇運動の第一線にいる劇作家としての評価が固まる。エリノアたちの内輪の朗読会だけがそうしたイブセン流行を促したわけではもちろんないが、1880年代の英国でのイブセン受容史のなかで、ひとつの大変印象深く重要な一幕であったということは間違いないだろう。

#### 4. 「イブセン派」と「反イブセン派」

1889年にはロンドンのノヴェルティ・シアターの劇場主となった俳優のチャールズ・チャリントン(1854-1926)が同劇場にて新たな英訳(William Archer 訳)を上演台本として『人形の家』の公演を打った。これが英国でのプロによる同作品の最初の公演であった。この公演の実現に向けて積極的に援助したのがエリノアとエイヴリング、そしてショーであった。ノラを演じたのはチャリントンの妻のジャネット・アチャーチ(Janett Achurch, 1863-1916)、これが彼女が一番の当たり役となり、これによって彼女は当代きっての人気女優となる。のみならず、この上演自体が英国でのイブセンの評判を大いに高めることにもなった。



ジャネット・アチャーチ

もっとも、ヴィクトリア朝の中流層の因襲的な倫理観を逆撫でにするイブセン劇に対する反撥も強く、批評家たちも「イブセン派」と「反イブセン派」とに分かれ、激しい論争が交わされた。英国中流層の「常識」に応える目的で『人形の家』の続篇を書く作家も現れた。ウォルター・ベザント(Walter Besant, 1836-1901)による「人形の家とその後」(“The Doll’s House and After,” 1890)と題する雑誌記事がそれで、そこではノラに捨てられた夫と三人の子供の悲惨な後日談が描かれる。夫と長男は酒で身を持ち崩し、次男は(原作での母の悪い真似をして)文書偽造に耽り、娘はクログスタの息子との結婚の夢に破れて入水自殺する。すると「イブセン派」のショーがこれに対抗し、『人形の家』

のさらにその後——ウォルター・ベザント氏によるヘンリック・イブセンの戯曲の続きへの続き」(Still after the Doll's House: A Sequel to Mr. Walter Besant's Sequel to Henrik Ibsen's Play," 1890) と なんと人喰ったタイトルの「続篇の続篇」で意趣返しをする。エリノア自身も亡命ユダヤ人作家イズレイル・ザングウィル (Israel Zangwill, 1864-1926) との合作で「『人形の家』の修繕」("A Doll's House Repaired," 1891) を社会主義運動の同志ベルフォート・ボックス (Belfort Bax, 1854-1926) が編集していた小雑誌『タイム』(Time)1891年3月号に掲載、のちに16ページのパンフレットとして刊行した (Kapp 724)。こちらのほうは「続篇」ではなく、やはり皮肉を込めながらもショーとはアプローチを変えて、体面を大事にする中流層の「健全なる英国人の常識」に照らして、「明らかにありえない、いや、不埒であるとして憤っている」批評家たちの見地から結末部分の「短所」を「修繕」した場合にどうなるか、という設定で原作の第3幕を書き換えてみせた。この第3幕「喜劇」版においては、ノラは家族を捨てて家を出ていくのではなく、妻として道を誤ったことを悔いて結婚生活を続けさせてくれるよう夫に懇願する。トルヴァル・ヘルメルとはいえば、「妻の罪を罰するため彼女を捨てることもできたであろうが、体面を保つため、兄・妹の関係でいっしょに住むことにした、思いやり深い夫」として描かれる (都築 201-2)。

「反イブセン派」の動きも活発であったとはいえ、イブセンが導入した因襲への異議申し立て、とりわけ女性が蒙ってきた不自由な状況を意識化し変革しようという機運は抑えようもなく、ノラに続けとばかりに、1890年代に「新しい女」たちの表現が日ましに増える。これについては佐々井啓教授のご発表「1890年代イギリス演劇にみる女性の自立と参政権について」において論じられているので、そちらをご覧ください。

## おわりに

以上見たように、1880年代に(また引き続き1890年代に)英国に紹介されたイブセンの一連の戯曲、とりわけ『人形の家』(『ノラ』)は賛否両論があり、激しい論争の的となった。とりわけ『人形の家』はヴィクトリア朝の「リスベクタビリティ」を重んじる保守的な中流層から反感を買ったものの、「演劇芸術の新しい流派の創設」(ショー)につながったと評価される。劇作家ショーのイブセン評価はよく知られるが、今回比較的詳しく論じたエリノア・マルクスによるイブセン紹介も実質的で重要である。『人形の家』のエリノア(とザングウィル)による「修繕」版も注目に値する。

なお、本報告はエリノア・マルクスを中心として1880年代の英国での『人形の家』の受容に話を絞ったが、エリノアによるイブセン紹介の仕事として彼女自身の翻訳がある。イブセンの英語圏への紹介ということだけを目的として彼女はノルウェー語を習得し、『民衆の敵』(*En Folkefiende*, 1882)を*An Enemy of Society*という英語題名で1888年に、また『海の夫人』(*Fruen fra havet*, 1888)を*The Lady from the Sea*として1890年に英訳し刊行している。後者は1891年にロンドンのテリーズ・シアターでエリノアとエイヴリングの共同プロデュースにて上演された。2作品を比べて、『海の夫人』のほうが翻訳の出来がよいというのが一般的な評価である。『民衆の敵』がエリノアの抱く社会主義の理念と最も齟齬を来したイブセン作品であることに拠るのではないかとサリー・レジャーは示唆している (Ledger 63)。ちなみにエリノアは両親の母語であるドイツ語はも

とより、フランス語も堪能で、ギュスターヴ・フロベール (Gustave Flaubert, 1821-80) の代表作『ボヴァリー夫人』(Madame Bovary, 1856) の最初の英訳者でもあったことも附言しておかねばならない (1886年に刊行)。

デザイン史上の再評価が近年めざましいメイ・モリスが、エリノア・マルクスやショーと協働して英国でのイプセン受容に貢献したことも、従来注目されていないが、意義深いことだった。父の戯曲の上演で舞台に上がったこと、また彼女自身も戯曲を数本書いていることはすでにふれたが、メイの演劇への関心についても今後さらなる検討を要する。

### 主要参考文献

- Baxandall, Lee. "The Revolutionary Moment." *The Drama Review: TDR*, Vol. 13, No. 2 (Winter 1968), pp. 92-107.
- Christian, Mary. "'A Doll's House Conquered Europe': Ibsen, His English Parodists, and the Debate over World Drama." *Humanities* 2019, 8, 82; doi:10.3390/h8020082.
- Holmes, Rachel. *Eleanor Marx: A Life*. Bloomsbury Publishing, 2014.
- Kapp, Yvonne. *Eleanor Marx*. Verso, 2018. Kindle.
- Kelly, Katherine E. "Alan's Wife: Mother Love and Theatrical Sociability in London of the 1890s." *Modernism/modernity*, Volume 11, Number 3, September 2004, pp. 539-560. <https://doi.org/10.1353/mod.2004.0058>. (Accessed 16 Jan. 2024.)
- Kennedy, Maev. "A handsome Valentine: May Morris's love letter to George Bernard Shaw." *Guardian*, 14 Feb. 2017. <https://www.theguardian.com/culture/2017/feb/14/a-handsome-valentine-may-morris-love-letter-to-george-bernard-shaw>. (Accessed 16 Jan. 2024.)
- Ledger, Sally. "Eleanor Marx and Henrik Ibsen." John Stokes, ed. *Eleanor Marx (1855-1898)*, Ashgate, 2000; Routledge, 2016, pp. 51-67. Kindle.
- Marsh, Jan. *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938*. Pandora Press, 1986. [ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』中山修一、小野康男、吉村健一訳、晶文社、1993年]
- Marx, Eleanor, and Israel Zangwill. "A Doll's House Repaired." *Time* March 1891; Marxists Internet Archive. <https://www.marxists.org/archive/eleanor-marx/1891/dolls-house-repaired.htm>. (Accessed 17 Jan. 2024.)
- Mason, Anna, et. al. *May Morris: Arts & Crafts Designer*. Thames & Hudson in association with the Victoria and Albert Museum, London, 2017; reprinted 2018.
- Mason, Susan. "Staged Ibsen Readings: An Eminent Tradition." *Ibsen News and Comment*, No. 6 (1985) pp. 20-21.
- Morris, May. *Decorative Needlework*. Joseph Hughes, 1893.
- . *William Morris, Artist, Writer, Socialist*. 2 vols. Basil Blackwell, 1936.
- . ed. *Collected Works of William Morris*. 24 vols. Longmans, Green, 1910-1915.
- Morris, William, et al. *Arts and Crafts Essays*. Rivington, Parcival, 1893
- Weintraub, Stanley, ed. *Shaw: An Autobiography 1856-1898*. Vol. 1. Weybright and Talley, 1969.
- イプセン、ヘンリック『人形の家』毛利三彌訳、論創社、2020年、Kindle。
- 川端康雄「「ファリンドン通りのアリストパネス」—ウィリアム・モリスの社会主義演劇『テーブルは覆る、ナプキンは目覚める』覚書」『日本女子大学英米文学研究』第55号、2020年、139-58頁。<https://jwu.repo.nii.ac.jp/records/3365>. (Accessed 16 Jan. 2024.)
- 都築忠七『エリノア・マルクス 1855-1898—ある社会主義者の悲劇』みすず書房、1984年。

## 2. 1890年代イギリス演劇にみる女性の自立と参政権について

佐々井 啓

1889年7月、ヘンリック・イブセンの『人形の家』がロンドンで上演され、以後、「新しい女」をテーマとした演劇がしだいにみられるようになる。1900年代には女性の自立についての演劇が上演されるようになった。その背景には女性参政権運動の高まりがあり、数々の集団が結成されている。

本研究では、女優を中心として1908年に設立された「女優参政権同盟」のメンバーとなった女優や、運動を支持していた脚本家、劇場、アクター・マネージャーなどの関わりについて調べる上で、女性参政権運動の基礎となった1890年代の演劇を取り上げる。

### 1. “The Second Mrs. Tanquary” 『タンカレイの後妻』<sup>1</sup>

アーサー・ウィング・ピネロ 1893年5月

#### 1) 登場人物とあらすじ

ポーラ：タンカレイの後妻、元娼婦

オレイド従男爵夫人：ポーラと同じ出自をもつ友人

コーテリオン夫人：エリーンの母の友人

エリーン：出生時に母により修道院に預けられ、19歳で自宅に戻る

富裕な中産階級の男性であるタンカレイは、敬虔なローマン・カトリックの信心深い女性と結婚した。妻は生まれたばかりの女兒エリーンを修道院に預けてしまう。妻を亡くしたオーブリー・タンカレイは、再婚相手に高級娼婦のポーラを選ぶ。ポーラとの結婚を友人たちに告げ、彼らとの付き合いを絶つことを知らせる。

エリーンが19歳になって修道院を出て同居することになるが、ポーラには冷たい態度をとっている。娘のエリーンは継母とうまくいかず、何気ない一言でポーラを傷つける。

エリーンは母の友人とパリに行き、そこで知り合った男性と結婚するつもりで帰国する。その男性は、かつてポーラのパトロンであったことが明らかになり、ポーラはエリーンに知られたことで行く末を悲観して窓から飛び降りる。エリーンは自分の言動を悔やむ。

#### 2) 「新しい女」としてのポーラ

本作品では高級娼婦であったポーラが「新しい女」として描かれているが、悲劇に終わる「新しい女」である。以下に劇評を引用しよう。

① *Illustrated Sporting and Dramatic News* 1893年6月10日

文中には、ストーリーの紹介と共に、次のような解説がある。

「彼女が妻になりたいと思うのと同じようにどれほど多くの財産があり、育ちの良い紳士がこの

1 佐々井啓「19世紀末イギリスの舞台衣裳にみる New Woman—『タンカレイの後妻』を中心に」『日本家政学会誌』64巻3号、2013年3月、157-166頁。

ような女性と結婚するだろうか」

この文からは、この劇は従来の伝統的なイギリス社会に投げかけた問題劇として評判になったが、現実にはほとんどあり得ないことであると読み取ることができる。

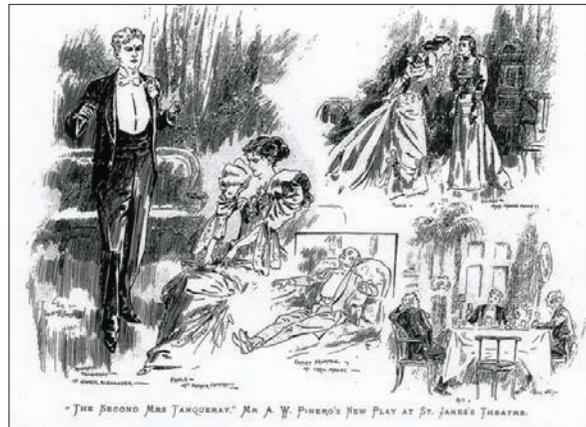
しかし、ピネロの意図は、おそらくピネロがイプセンに語り掛ける風刺画の台詞に示されているだろう。

「私はあなたに合うようないくつかの新しいものを持っています」

ここでは、ピネロがイプセンを継承し、彼を超えていくのでは、という風刺が読み取れるが、ある意味でピネロに対する期待が込められているのではないだろうか。



ピネロ (左) とイプセン  
*Illustrated Sporting and  
Dramatic News* 1893年6月10日



劇の様子 *The Queen*, 1893年6月3日

② *Lady's Pictorial* 1893年6月3日

女性誌には、衣装の紹介と共に、次のような文が載っている。

「とにかくピネロ氏はイギリスのイプセンである」

「これまでに最も深刻で、価値のある、注目に値する劇」

このような批評は、ピネロの作品についての評価が女性誌においては一般的になりつつあることが明らかであるといえよう。更にポーラを演じたパトリック・キャンベル夫人は一躍有名となり、以後、演劇において主要な女性の役を演じることとなった。

ピネロは『人形の家』を「合理的で、鋭い観察による、家庭の劇」と評し、本作品において『人形の家』のテーマを実現した、と述べている。すなわち、ピネロはイプセンの影響を自らも認めながら、イギリスにおいていち早くイプセンのテーマである女性の自立について取り上げていたことが明らかである。そして、以後のイギリスの演劇界において新しい女性を取り上げる演劇がしだいに多くなっていったといえよう。

## 2. “The New Woman” 『新しい女』<sup>2</sup>

シドニー・グランディ 1894年9月1日

### 1) 登場人物とあらすじ

シルベスター夫人：「新しい女」の代表的な人物

若い男性ジェラルドと共同で『結婚の倫理』という本を出版しようとしている。

ペヴァン女史：医者 ビバッシュ嬢：作家 ビートン嬢：著述家

レディ・ウォーグレイブ：旧思想の代表

マージェリー：ウォーグレイブのメイド

本作品はタイトルのとおり、「新しい女」を取り上げた劇である。4人の「新しい女」たちは、それぞれ自立した職業を持ち、共に進歩的な活動をしてきていることが明らかになっている。本作品では、4人の「新しい女」が会話の中で主義主張を繰り広げていくという手法を取っている。

### 2) 「新しい女」の特徴—「ドアの鍵」、「タバコ」、「自転車」

「新しい女」を表すときに、特徴的に用いられているのが、上記の3点であるが、本作品では「自転車」は登場しない。そこで、「料理をしない」という行為を付け加えてみたい。

#### ① ドアの鍵

ドアの鍵は、鍵を持って自由に家に入出りできる権利という意味であり、すなわち女性の自由への権利である、という意味を持つ。また、「ミルクと一緒に家に帰る権利」とも言われ、女性が「朝帰り」することを指している。これはまさに男性と同じく女性の自由を主張することであり、当時の道徳とは相いれない主張であったといえよう。

#### ② タバコ

女性がタバコを吸うことにはまだ多くの偏見が存在していた。しかし、男性と同等の権利を主張するという点から、タバコを吸う女性が描かれるようになる。

著述家のビートン嬢は「主義のためにタバコを吸う」と言い、実際には、吸いなれていないので、吸い口を間違えている様子が描かれている。また、好意を持っている男性が近づくとタバコを隠すという行為もみられる。

#### ③ 料理をしない

夕食に前日の食事の残りを出そうとするシルベスター夫人に対して夫は不満を言うが、夫人は、「昔は妻は奴隷とみなされていましたが、現代は料理人ですわ」と言いながらも、「新しい女」は料理人さえも拒否することを主張している。

本作品で「新しい女」を表すものは、「仕事をする」、「精神的な愛を求める」、「料理をしない」、「ドアの鍵を持って自由に行動する」、「タバコを主義のために吸う」ということが、登場人物の台詞から示されている。

---

2 佐々井啓「19世紀末イギリスの演劇 The New Woman にみる「新しい女」—その精神とファッション—」『日本家政学会誌』58巻1号、2007年1月、23-33頁。

さらに「新しい女」たちが「テーラー・メイドの衣服を着る」ことは、合理的で進歩的な女性の開放をめざす特別な主張を持っていることを示しているのである。

また、「最新流行のドレスを着る」ことは、奇抜な色彩やデザイン、装飾のドレスによって、伝統的な装いからは外れた挑戦的な態度を示しているといえよう。



テーラード・スーツ  
タバコ  
The Queen, 1894年  
9月15日



鳥の装飾  
シルベスター夫人

### 3. “The Case of Rebellious Susan” 『反逆するスーザンの事件』<sup>3</sup>

ヘンリー・アーサー・ジョーンズ 1894年10月3日

#### 1) 登場人物とあらすじ

スーザン：上流階級の主婦、夫の不貞を知り、別居して若い男性に惹かれる

アイネス：未亡人（ケズネル夫人）

エレーン：「新しい女」を標榜、配偶者は唯美主義者のファーガソン

スーザンは、夫の不貞を知り、カイロに滞在する。叔父の息子であるルシアンと知り合い、駆け落ちをする計画を立てていたところ、ルシアンが結婚すると知らされ、ルシアンからの小箱をもらう。それには、ウェディング・ケーキとかつてルシアンに贈った指輪が入っていた。スーザンそれらを自分の指輪と一緒に暖炉に投げ入れる。

そこにエレーンの夫のファーガソンが訪ねてきて、エレーンはクラパムの女性電報局員のストライキに加わり、女性の自由の獲得のために戦う、と述べる。さらにエレーンは家事をしないと宣言するが、叔父は、女性は家庭にいるべきであると説教する。最後にスーザンは過去を振り切ってよい妻になるといい、夫もまた良い夫となることを誓う。

#### 2) スーザンと「新しい女」エレーン

スーザンは夫から不貞の償いとして、カンヌのヴィラでの滞在とダイヤモンドの指輪とブレスレットを買うことを提案されたが拒絶する。若い男性との生活を夢見ていたが捨てられてしまって、現実の生活への反逆は失敗に終わる。しかし、最後に夫の「ボンド・ストリートにある店の全部の品を買う」という言葉に承諾する。結局スーザンは、家庭で夫の庇護のもとに生活することを

3 佐々井啓「19世紀イギリスの舞台衣裳にみる「新しい女 New Woman」—『反逆するスーザンの事件』を中心に」『日本家政学会誌』66巻3号、2015年3月、129-136頁。

選択するのである。

一方、女性の権利についての運動に積極的に参加しているエレーンは、赤い髪と緑の衣装とで、唯美主義の女性を示している。エレーンは想定された「新しい女」として登場し、同じ思想を持つ夫と結婚したが、妻としての役割を果たすことを拒んだ。

この二人の女性の生き方は、当時の社会状況を反映しているであろう。本作品は単にスーザンの反逆が失敗に終わった、という喜劇ではなく、「新しい女」としての出発を否定され、伝統的な社会の重圧に屈した女性の悲劇である、と言いたかったのではないだろうか。



劇の様子

*The Queen*, 1894年10月13日



エレーン：テーラード・スーツ

夫：黒いベルベットのコート

*Lady's Pictorial* 1894年10月13日

#### 4. “An Ideal Husband” 『理想の夫』<sup>4</sup>

オスカー・ワイルド 1895年1月3日

##### 1) 登場人物とあらすじ

ゴーリング卿：チルターン卿の友人、ダンディの代表、友人の危機を救う

チルターン卿：優秀な政治家、出世を目指している。妻の理想を実現しようとする

チルターン卿夫人：教養のある進歩的な女性、夫の将来に尽くす

チェブリー夫人：悪賢い女山師、チルターン卿を強請る

メイベル・チルターン：チルターン卿の妹、ゴーリング卿と結ばれる。現代的な女性

チルターン卿が政府の機密情報を手に入れて巨額の富を得た過去を知ったチェブリー夫人が、その弱みに付け込んで一儲けしようとして絡んでくる。そのことを知ったゴーリング卿は、チェブリー夫人の過去の悪事を示して機転を利かせ、友人を救う。

チルターン卿夫人は、伝統的な価値観を持ちながら、女性の新しい考えにも賛同する「新しい女」として描写されている。

4 佐々井啓「ワイルドの喜劇と舞台衣裳—『理想の夫』を中心に—」『国際服飾学会誌』19号、2001年5月14-25頁。

## 2) チルターン卿夫人、メイベル、チェブリー夫人

チルターン卿夫人は進歩的な考えを持っている女性であり、「婦人自由連盟 Woman's Liberal Association」の会合に参加し、夫への内助の功を実践しようとする賢夫人である。彼女は過ちを許さない正義感の強い性格から、夫を窮地に追い込んでしまう。しかし最後には過ちを赦す心を持つことにより、無事に夫との生活を続けることになる。

メイベルは、若くて進歩的な考えを持ち、結婚相手には一般的な理想の夫を否定する。彼女は「女のダンディ」と評され、流行のドレスを着こなした新しい女性である。

チェブリー夫人は、女山師として登場し、エメラルド・グリーンのドレスの裾にツバメの装飾があり、さらに2羽が肩と胴についた人目を引くドレスを着ている。これは「奇抜で不快である」と評されており、彼女の女山師という特異な性格を表している。



劇の女性たち  
*The Queen*, 1895年  
1月12日



チェブリー夫人  
ツバメの装飾のドレス  
*Black and White*,  
1895年1月12日



メイベル  
黄色のイブニング・ドレス  
*Sketch*, 1895年  
2月13日

## 5. 女性参政権運動の萌芽

女性参政権運動は、20世紀に入って盛んになり、さまざまな活動が行われていた。1890年代の演劇において、次第に高まる女性の権利を主張する運動に対して、女性の自立、参政権などをテーマとした演劇が少なからずみられるようになった。しかし、それらは十分に支持を得られてはいなかったが、演劇という媒体を通して、20世紀に向けて盛んになってきたといえよう。

1908年に設立された「女優参政権同盟 Actresses Franchise League」に参加した女優に、イレーヌ・バンブラが挙げられる。『バンブラ回想録』には、『タンカレイの後妻』について次のようなエピソードが記されている<sup>5</sup>。

(ジョージ) アレクサンダーは私にタンカレイにも出演するように話した。私は「どんな役に充てるの？」と聞くと彼は「レディ・オレイド」と答えたので、私はすかさず「私はそれで

5 Irene Vanbrugh, "To Tell My Story" (Hutchinson & Co. Ltd, 1950) p.32.

は演じないわ、と答えた。(中略) アレクサンダーは「どの役？」と聞くので、「エリーン」と答えた。

バンブラは、ワイルドの“*The Importance of Being Earnest*” (真面目が肝心) に、進歩的で教養のある女性グェンドレン役で出演している<sup>6</sup>。

本稿で取り上げたアーサー・W・ピネロや、アクター・マネージャーのジョージ・アレクサンダーは女性参政権運動を支持していたと推察される。その後、このような脚本家、アクター・マネージャーたちは、「女優参政権同盟」設立時には協力者として名を連ねており、それらについては今後の課題としたい<sup>7</sup>。

### 主要参考文献

- 河村貞枝『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』(明石出版、2001年)  
河村貞枝・今井けい編『イギリス現代女性史研究入門』(青木出版、2006年)  
レイ・ストレイチー [著]; 吉田尚子 [ほか] 共訳『イギリス女性運動史 1792-1928』(みすず書房、2008年)  
伊藤航多・佐藤繭香・菅靖子編著『欲ばりな女たち』(彩流社、2013年)  
英米文化学会『ロンドンの劇場文化-英国近代演劇史』(朝日出版社、2015年)  
佐藤繭香『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ: エドワード朝の視覚的表象と女性像』(彩流社、2017年)  
三神和子、小池久恵、丸山協子編著; 加藤彩雪 [ほか] 著: 『わたくしを生きた女性たち—20世紀のイギリス女性評伝集』(音羽書房鶴見書店、2020年)  
Irene Vanbrugh, “To tell my story” (Hutchinson & Co. Ltd, 1950)  
Russell Jackson, “Plays by Henry Arthur Jones” (Cambridge University Press, 1982)  
Russell Jackson, “Victorian Theatre” (New Amsterdam Books, 1989)  
Penny Griffin, “Arthur Wing Pinero and Henry Arthur Jones” (St. Martin’s Press, 1991)  
Collins Classics, “Complete Works of Oscar Wilde” (Harper Collins Publishers, 1994)  
Kerry Powell, “Woman and Victorian” (Cambridge University, 1997)  
Gail Marshal “Actresses on the Victorian Stage” (Cambridge University Press, 1998)  
Oxford World Classics, “The New Woman and other Emancipated Woman Plays” (Oxford University Press, 1998)

---

6 Ibid., p.33.

7 女性参政権運動については、武蔵大学佐藤繭香教授よりご教示いただいた。

### 3. 演劇界における女性の自立 日本女子大学校および附属高等女学校の卒業生についての調査

鈴木 幹子（附属中学校 元教諭）

#### 1. はじめに

19世紀後半からの日本の演劇界における女性について研究するにあたって、まず明治時代の日本女子大学校の関係者から調べてみようと考えた。まだ、調査途中の段階ではあるが、帝劇全盛期に活躍した戯曲家大村嘉代子と、新しい女優の道を歩んだ林千歳について少し述べたいと思う。

#### 2. 女性戯曲家 大村嘉代子

嘉代子は、明治16年高崎市に生まれるが、その後父が士官学校の国語教官となったため、東京の麹町に転居している。東京府立の高等女学校を卒業、修了後、日本女子大学校国文科へ入学し、明治37年国文学部第一期生として卒業している。学生時代から新体詩などの創作をはじめ、発表しているが、女子大学校機関紙『花紅葉』の創刊時には、桜楓会会歌が掲載されている。

明治39年に静岡の製茶会社社長大村和吉郎と結婚。夫はアメリカ留学の経験もあり、文学への理解も深かったので、結婚後も詩や随筆を創作し、『家庭週報』にも発表を継続している。夫と共に芝居をよく観劇していたことが、脚本を書いてみようと思うきっかけになったのではないかと思われる。

明治44年に『青鞥』が創刊され、社員として参加し、その年に新時代の作家として注目された岡本綺堂に入門し、脚本の執筆を始める。大正9年の「みだれ金春」が、嘉代子の出世作になる。

朗読劇として製作されたDVD『目白の雪の日』は、附属中学校では毎年、学校の歴史や創立者について知る機会として、告別講演記念日前に1年生が鑑賞している。

（大村嘉代子 年譜）

明治16(1883)年12月23日 小田原藩士族 木野村成徳と基子の長女として、群馬県高崎市に生まれる。戸籍名 木野村かよ。

明治19(1886)年 父成徳が士官学校国語教官となったため、東京府麹町番町付近に転居。

明治33(1900)年 東京府立第一高等女学校を卒業、東京府立第二高等女学校補修科を修業。

明治34(1901)年 4月 日本女子大学校国文学部へ入学 高等女学校時代からの友人佐藤（田村）俊子、小橋三四子、守屋東と同級となる。

明治35(1902)年 新体詩などの創作を始める。

明治36(1903)年 新体詩「衣笠城」を『日本女子大学校学報』一号に発表する。

明治37(1904)年 3月26日 日本女子大学校国文学部第一期生として卒業。

明治38(1905)年 日本女子大学校機関紙『花紅葉』が創刊、第1巻巻頭に嘉代子作詞の桜楓会会歌が掲載。

明治39(1907)年 大村和吉郎と結婚。（和吉郎はアメリカ留学の経験もあり文学への理解も深かったため、嘉代子は結婚後も詩や随筆を創作した。『家庭週報』にも作品発

表を継続。)

- 明治42(1909)年 長女三保子を出産、育児に追われるが、この時の経験を「三保子の発育日誌」として『花紅葉』に載せている。
- 明治44(1911)年 小説「静岡の友」に激怒し、田村俊子と絶交。  
(「学校ではキレル女であつた将来何に事かやるだらうと思つたのに家庭の人となつてからはすっかりダメになつてしまつたというような冷笑を浴びせた一編」「新しい女星」『読売新聞』大正2・1・6)  
9月、『青鞥』が創刊、社員として参加。大村かよ子の名で「一諾」を発表。  
年末、岡本綺堂に入門。(岡本綺堂は「修禅寺」物語の成功により、新時代の作家として注目された人物。結婚後、和吉郎と芝居をよく観劇していたことが一つの機縁になったのではないかと思われる。
- 明治45・大正1(1912)年 作品の発表はないが、綺堂のもとで劇作を書く努力をしていたと思われる。
- 大正2(1913)年 1月 史劇「紫蓮(しれんものがたり)」が有楽座の女優劇として上演。
- 大正9(1920)年 5月 「みだれ金春」が、帝国劇場で初演、名古屋・神戸でも上演され、嘉代子の出世作となる。
- 昭和10(1935)年 4月 戯曲「目白の雪の日」を発表。日本女子大学校設立の過程から、成瀬仁蔵の死までを描いた作品。(松竹から上演の依頼があったが、破談となる)
- 昭和14(1939)年 岡本綺堂逝去
- 昭和15(1940)年 戦時下の雑誌統合により、『舞台』は『国民演劇』に吸収される。

### 3. 女優 林千歳

林千歳は、明治22年に東京市芝区琴平町に生まれるが、一家の転居により関西で育つ。日本女子大学校に入学後、文芸講習会に参加し、明治42年文芸協会演劇研究所に合格、9月に文学部を退学している。

同じ研究所の林和(のち劇作家)との交際が文芸協会の会則に抵触して退所となるが、結婚・出産後復帰を許されて演劇活動を再開する。

明治45年 松井須磨子主演の『マグダ』の妹マリー役で、初舞台を踏む。文芸協会解散後は、「舞台協会」に活動の場を移す。

(林千歳 年譜)

- 明治22年(1889)年 8月21日東京市芝区琴平町に、士族河野幸友の次女として誕生。父は銀行員。
- 明治40年(1907)年 大阪府立堂島高等女学校を卒業。日本女子大学校普通科予科に入学。  
九段中坂下のユニヴァーサリスト協会で行われていた文学講習会に参加。  
会員の中には、平塚明子(らいてう)、青山(山川)菊英、大貫(岡本)かの子がいた。

- 明治41(1908)年 日本女子大学校普通予科を修了し、文学部第一学年第一期へ入学。
- 明治42(1909)年 8月 文芸協会演劇研究所演劇研究科の補欠募集に応募し合格。  
小林正子(のちの松井須磨子)と五十嵐芳野(日本女子大学校英文科)がいた。  
9月 家事都合を理由に文学部を第二学年第二期で退学。  
11月 同じ演劇研究所の林和と交際する。
- 明治43(1910)年 1月 林和との交際が文芸協会の会規に抵触、**演劇研究所を退所**。  
小説家で劇作家の江見水蔭の媒酌により林和と結婚。
- 明治44(1911)年 長女歌子を出産。和の実家の兄夫婦の元に里子に出す。  
文芸協会への復帰が許されて活動を再開。
- 明治45(1912)年 **社員として青鞞社に入社**。4月『青鞞』第二巻四号に「乙彌と兄」を発表。  
5月 文芸協会第3回公演「故郷」四幕、英訳『マグダ(magda)』松井須磨子  
演じるマグダの妹マリー役で**初舞台**を踏む。
- 大正2年(1913) 7月 文芸協会解散 千歳は夫の和と共に「舞台協会」に活動の場を移す。
- 大正3年(1914) 『青鞞』(第4巻第9号)に俳優夫婦の齟齬を描く「待ち侘び」を発表。

#### 4. おわりに

大村嘉代子も林千歳も『青鞞』の社員として在籍していた時期があり、詩歌や文学作品を発表していたが、当初から脚本家や女優を志し、活躍していたわけではなかった。それぞれ結婚を機に舞台に関わる人間関係が広がったと考えることもできそうである。『青鞞』が与えた社会的な影響、演劇界における二人の活躍の後半を、今後継続して調査していきたいと思う。

尚、二人の経歴は、日本文学専攻岩淵研究室(『青鞞』と日本女子大学校同窓生[年譜])から借用したものであり、ここに謝辞を申し上げる。

#### 主な参考文献

- ・大村かよ子『家庭週報』脚本『毒流し』第259～264号(1914年2月20日～3月27日)
- ・大村嘉代子 朗読劇『目白の雪の日』DVD 演出 小森美巳(『目白の雪の日』制作委員会、2009年)
- ・堀場清子『青鞞の時代』(岩波新書、1988年)
- ・青鞞社編『青鞞小説集』(講談社文芸文庫、2014年)
- ・らいてう研究会編『青鞞人物事典』(大修館書店、2001年)
- ・『青鞞』と日本女子大学校同窓生[年譜]』(日本女子大学大学院文学研究科日本文学専攻岩淵(倉田)研究室編集発行、2002年)
- ・『日本女子大学総合研究所紀要』第8号(2005年)
- ・中村哲郎『歌舞伎の近代 作家と作品』(岩波書店、2006年)
- ・米田佐代子『近代日本女性史』上(新日本出版社、1972年)